

鶏病事例研修会記事(第1回:1973.6.5-第62 回:1978.8.25)

誌名	鶏病研究会報
ISSN	0285709X
巻/号	15巻3号
掲載ページ	p. 130-136
発行年月	1979年9月

《資料》

鶏病事例研修会記事

鶏病事例研修会は1973年6月15日に鶏病支場で第1回が開催されて以来、原則として毎月同支場で開催されている。その内容は家畜衛生週報に掲載されている。今回会報にも記事を紹介することにしたがすでに71回を終了しているので、第1から第60回までは題名、氏名及び記事を掲載してある家畜衛生週報 No. を、第61回からは記事を掲載することにした。

☆第1回 1973年6月15日(衛生週報 No. 1295)

1. 日齢が進んでからの鶏脳脊髄炎の発生。佐々木栄英(静岡県家畜衛研)
 2. ニューカッスル病ワクチンによる免疫持続期間。渡木一昌(奈良県北和家保)
 3. 鶏ビブリオ肝炎の発生例。山中進吾(三重県中勢家保)
- [解説] ニューカッスル病における局所免疫。吉田勲(鶏病支場)

☆第2回 1973年7月13日(衛生週報 No. 1295)

1. 眼球水腫 Buphthalmos を主訴とする胸筋炎。坂井尚武(岐阜県後藤藤卵場)
 2. 伝染性気管支炎ウイルスによるとと思われる腎症 of 1例。合田光昭(愛知県経済農協連)
 3. 鶏の肝破裂症。多田憲市(福井県福井家保)
 4. アンモニア発生環境下におけるニューカッスル病血球凝集抑制抗体価について。渡辺広美(愛知県養鶏研究所)
- [解説] 鶏ニューカッスル病の予防。椿原彦吉(鶏病支場)

☆第3回 1973年8月24日(衛生週報 No. 1296)

1. ベンギンのアスペルギルス症。鶴田学(愛知県西三河家保)
 2. プロイラーに多発する筋肉内出血。坂井尚武(岐阜県後藤藤卵場)
 3. 鶏脳脊髄炎の中・大雛期における野外発生例。佐藤優(日本大学修士)
- [解説] 野外における病理学的診断の限界。収田正義(岐阜県後藤藤卵場)

☆第4回 1973年9月21日(衛生週報 No. 1296)

1. 成鶏期の疾病について。富松洋(岐阜県種鶏場)
2. 鶏のリンパ性腫瘍の死後変化。佐藤優(日本大学修士)
3. 飼料が原因と思われる脚弱症(骨軟症)の野外例。牛島公(東食デカルブ)

[解説] 鶏白血病研究における最近の動き。高取一郎(家畜衛試・伝賃部)

[解説] 蛍光抗体法の理論と応用。川村斉(鶏病支場)

☆第5回 1973年11月16日(衛生週報 No. 1297)

1. 鶏の封入体肝炎。山中進吾(三重県中勢家保)
2. 鶏の呼吸器性マイコプラズマ病の試作ワクチンによる野外試験。小林銅司(兵庫県姫路家保)
3. 白癬と診断されたマレック病皮膚病変。坂井尚武(岐阜県後藤藤卵場)
4. コクシジウム原虫の寄生状況。高橋和男(愛知県経済農協連)

[解説] マイコプラズマ・シノビエ感染症。佐藤静夫(鶏病支場)

[特別講演] アメリカでのニューカッスル病の発生状況。国安主税(家畜衛試・製造部)

☆第6回 1973年12月14日(衛生週報 No. 1297)

1. 鶏のクレオソート中毒例。坂井尚武(岐阜県後藤藤卵場)
2. 急激な産卵低下を伴った鶏病。多田憲市(福井県福井家保)
3. 潰瘍性腸炎(うずら病)の発生例。園部修(岐阜県岐阜家保)
4. 鶏痘ワクチンの接種部位による免疫性の効果試験。大須賀徹爾(静岡県養鶏試験場)

[解説] 鶏痘ワクチンの免疫について。宮本猛(日生研)

☆第7回 1974年1月18日(衛生週報 No. 1299)

1. ニューカッスル病と伝染性コリーザの混合不活化ワクチン接種後に発生した脚弱。坂井尚武(岐阜県後藤藤卵場)
2. ウィンドウレス飼育場の赤血球性状と免疫産生能。佐藤隆(奈良県北和家保)
3. 伝染性ファブリキウス嚢病(ガンボロ病)の移行

抗体の消失。山口成夫（鶏病支場）

〔解説〕 伝染性ファブリキウス嚢病（IBD）の血清疫学と抗体産生におよぼす影響。島倉省吾（岐阜大学農学部）

☆第8回 1974年2月22日（衛生週報 No. 1299）

1. 鶏のカビ性肺炎の発生とその防止対策。余田 岬（兵庫県和田山家保）

2. ニューカッスル病と伝染性コリーザの混合不活化ワクチンを接種した成鶏に発生した脚弱。坂井尚武（岐阜県後藤孵卵場）

3. 尿管の拡張と結石を伴う腎症。谷口稔明（鶏病支場）

〔解説〕 伝染性喉頭気管炎の野外診断。合田光昭（愛知県経済農協連）

☆第9回 1974年3月15日（衛生週報 No. 1302）

1. ニューカッスル病と伝染性コリーザの混合不活化ワクチンを接種した大雛に発生した脚弱。坂井尚武（岐阜県後藤孵卵場）

2. トリサンダニの発生病例。多田憲市（福井県福井家保）

3. ブロイラー種鶏の関節炎。杉山 明（三重県北勢家保）

4. ヘタリ病の血糖値。船橋史憲（愛知県畜産興農社）
〔解説〕 ブロイラーのヘタリ病。金子史郎（兵庫県姫路家保）、藤原義昭（兵庫県和田山家保）

☆第10回 1974年4月26日（衛生週報 No. 1302）

1. 伝染性ファブリキウス嚢病（IBD）ウイルスの分離。大滝与三郎（日生研）

2. 伝染性気管支炎（IB）の野外発生2例。川村 斉（鶏病支場）

〔解説〕 電気泳動法による蛋白質の同定。田名部雄一（岐阜大学農学部）

☆第11回 1974年5月17日（衛生週報 No. 1303）

1. 尿酸塩沈着症の発生。若井輝夫（岐阜県エンヤ）

2. ウインドウレス鶏舎における脂肪肝の発生。内田昭（大阪府農林技術センター）

3. ニューカッスル病ワクチン接種方式の検討。番場久雄（愛知県西三河家保）

〔解説〕 細胞性感染防御免疫の考え方。湯浅 襄（鶏病支場）

☆第12回 1974年6月21日（衛生週報 No. 1321）

1. アデノウイルスとブドウ球菌の人工感染。野々村勲（鶏病支場）

2. 静岡県内に発生したコクシジウム症に対する予防剤の効果について。椎原 隆（静岡県養鶏試験場）

3. 一過性麻痺症候群。坂井尚武（岐阜県後藤孵卵場）

〔解説〕 病原体と細胞反応を中心として。久葉 昇（名古屋保健衛生大学）

☆第13回 1974年7月19日（衛生週報 No. 1321）

1. ニューカッスル病生ウイルスワクチン噴霧接種の検討。中嶋 清（愛知県経済農協連）

〔解説〕 トリアデノウイルスについて。川村 斉（鶏病支場）

☆第14回 1974年8月23日（衛生週報 No. 1321）

1. 鶏痘ワクチネーションによると思われる感染性皮膚筋炎。坂井尚武（岐阜県後藤孵卵場）

2. 肉垂の腫脹が認められた事例。大村康治（静岡県家畜衛研）

3. 鶏の封入体肝炎（IBH）罹患鶏から分離したアデノウイルスの接種試験。1. 接種鶏体内におけるウイルスと蛍光抗原の分布。山口成夫（鶏病支場）

4. 鶏の封入体肝炎罹患鶏から分離したアデノウイルスの接種試験。2. 接種鶏の病変。谷口稔明（鶏病支場）

〔解説〕 鶏の管理と衛生対策との相互関係。古田賢治（鶏病支場）

☆第15回 1974年9月20日（衛生週報 No. 1324）

1. 鶏糞の飼料化。梅田 勲（岐阜県種鶏場）

2. 対コクシジウム病薬剤の比較。山田献一（滋賀県湖西家保）

3. ウインドウレス鶏舎内自動噴霧（消毒）装置の利用に関する研究。坂井田 節（岐阜県エンヤ）

4. 愛知県下に発生したブロイラーの封入体肝炎。合田光昭（愛知県経済農協連）

〔解説〕 アキバカウレリー感染鶏におけるインターフェロン産生。杉森 正（家畜衛試・研究第2部）

☆第16回 1974年10月25日（衛生週報 No. 1337）

1. 伝染性ファブリキウス嚢病（IBD：ガンボロ病）ウイルスとマレリア病（MD）ウイルスの曝露が不活化ニューカッスル病（ND）ウイルス接種鶏の抗体産生に及ぼす影響について。谷地田俊介（塩野義製薬油日ラボ）

2. 着衣に対する噴霧消毒効果。中村幸彦（愛知県養鶏研究所）

〔解説〕 第9回日米マイコプラズマ会議に出席して。吉田 勲（鶏病支場）

☆第17回 1974年11月22日（衛生週報 No. 1338）

1. ホルマリンガスによる FAPP 鶏舎の消毒効果。古田賢治（鶏病支場）

〔解説〕 鶏のロイコチトゾーン症。秋葉和温（鶏病支場）

☆第18回 1974年12月20日（衛生週報 No. 1339）

鶏病研究会報

1. マレック病の1例。杉山公宏（日獣大）
2. 総合ワクチネーションプログラムについて。桜井進（岐阜県種鶏場）
3. *Akiba caulleryi* のシゾゴニーに関する研究、とくに初期（3～6日）の形態について。関谷修三（鶏病支場）

〔解説〕 鶏白血病ウイルスの病原性について。日原宏（家畜衛試・伝貧部）

☆第19回 1975年1月24日（衛生週報 No. 1349）

1. 肉用鶏に発生したビタミンD欠乏性くる病の臨床生化学的検討。有安甫（京都府中央家保）
2. 肉用鶏に発生したビタミンD欠乏性くる病の病理変化。三船亮介（京都府中央家保）
3. 鶏伝染性コリーザのワクチン接種が抗体産生と産卵に及ぼす影響。若井輝夫（岐阜県エンヤ）

〔解説〕 鶏伝染性コリーザ。加藤和好（家畜衛試・北陸支場）

☆第20回 1975年2月21日（衛生週報 No. 1358）

1. *Mycoplasma synoviae* の同居感染試験。猪飼光武（愛知県養鶏研究所）
2. ブロイラーの発育不良及び脚弱症の集団発生例。山中進吾（三重県中勢家保）

〔解説〕 最近の米国養鶏を見て。毛利浩良（日本ビルチ原種農場）

☆第21回 1975年3月14日（衛生週報 No. 1364）

1. 伝染性ファブリキウス嚢病に対する鶏の感受性。山口成夫（鶏病支場）
2. 伝染性ファブリキウス嚢病ウイルスの細胞培養における増殖。若林忠男（鶏病支場）
3. 養鶏場に発生した寄生虫病について。木谷隆（岐阜県飛騨家保）

〔解説〕 中国の畜産について。海老沢昭二（岐阜県種鶏場）

☆第22回 1975年4月25日（衛生週報 No. 1368）

1. 血卵の多発例。多田憲市（福井県福井家保）
2. マイコプラズマ・シノピエの浸潤調査。中嶋清（愛知経済農協連農畜産衛研）
3. HVT凍結乾燥ワクチン接種後のゲル内沈降反応抗体試験成績。中村幸彦（愛知県養鶏研究所）
4. ブロイラー養鶏場に発生した大腸菌症（特に薬剤耐性とR因子検出）。山本明、橋崎真澄（静岡県中部家保）

〔解説〕 鶏の産卵に対するホルモン支配。田名部雄一（岐阜大学農学部）

〔解説〕 インフルエンザについて。熊谷哲夫（家畜衛

試・北海道支場）

☆第23回 1975年5月23日（衛生週報 No. 1374）

1. 種卵の消毒について。古田賢治（鶏病支場）

〔解説〕 鶏のビタミン要求量とその欠乏症。牛見忠藏（家畜衛試・研究第4部）

☆第24回 1975年6月27日（衛生週報 No. 1375）

1. 岡山県下に発生した鶏封入体肝炎について。栗栖和信（林薬品）
2. ブロイラーの呼吸器病。多田憲市（福井県福井家保）
3. 鶏のリンパ腫。後藤新平（岐阜県岐阜家保）
4. 骨化石症。佐藤優（日本大学修士）

〔解説〕 コクシジウムの生物学的性状。角田清（家畜衛試・研究第1部）

☆第25回 1975年7月25日（衛生週報 No. 1380）

1. マレック病（MD）ワクチンの移行抗体が次代の免疫に及ぼす影響について。皆川訓匡（愛知県種鶏センター）
2. マレック病ワクチン事故の再現について。原田良昭（台糖ファイザーHN事業部技術センター）
3. マレック病ワクチン事故の再現試験。溝内高充（兵庫県姫路家保）
4. 鶏白血病ウイルス接種群に認められた脾壊死について。石黒秀雄（松研）

〔解説〕 REV（細網内皮症ウイルス）について。湯浅襄（鶏病支場）

☆第26回 1975年8月29日（衛生週報 No. 1385）

1. 鶏のカルシウム過剰給与の影響。野垣琢哉（岐阜県種鶏場）
2. 飼料中のカルシウム不足と思われる症例。合田光昭（愛知経済農協連農畜産衛研）
3. マレック病ワクチンを接種した野外鶏に発生した異常の病変。谷口稔明（鶏病支場）

〔解説〕 野外の病性鑑定から一主要疾病の推移。吉村昌吾（愛知経済農協連農畜産衛研）

☆第27回 1975年9月26日（衛生週報 No. 1382）

1. *Mycoplasma gallisepticum* による関節膜炎。猪飼光武（愛知県養鶏研究所）
2. ブロイラー大雛に発生した Favus（黄癬）様疾患。山中進吾（三重県中勢家保）

〔解説〕 ウイルス感染と細胞性免疫。甲野雄次（家畜衛試・伝貧部）

☆第28回 1975年10月31日（衛生週報 No. 1388）

1. デビーク創に発現した鶏痘について。坂井尚武（岐阜県後藤孵卵場）

2. マレック病ワクチンに混在していたウイルスの性状と病原性。湯浅 襄 (鶏病支場)

3. REV グループウイルスの鶏での持続感染と卵への移行。川村 斉 (鶏病支場)

4. ファブリキウス嚢摘除鶏におけるニューカッスル病ウイルスの増殖と防御効果。湯浅 襄 (鶏病支場)

5. *Mycoplasma gallisepticum* の感染に及ぼすファブリキウス嚢の影響。佐藤静夫 (鶏病支場)

〔解説〕 インドネシアにおける鶏病について。佐々木栄英 (静岡県家畜衛試)

☆第 29 回 1975 年 11 月 21 日 (衛生週報 No. 1389)

1. 環境の相異と投薬効果。中村幸彦 (愛知県養鶏研究所)

〔解説〕 野外における鶏病抗体調査のまとめ。中井正久 (京都微研)

☆第 30 回 1975 年 12 月 19 日 (衛生週報 No. 1391)

1. カルシウム過剰飼料の投与。石塚喜四郎 (三重県南勢家保)

2. 野外のブロイラーに試験的に接種したマレック病ワクチンの効果について。中嶋 清 (愛知経済農協連農畜産衛研)

〔解説〕 鶏のブドウ球菌症。竹内正太郎 (家畜衛試・研究第 1 部)

☆第 31 回 1976 年 1 月 30 日 (衛生週報 No. 1410)

1. 種卵のホルムアルデヒド消毒が孵化率におよぼす影響。古田賢治 (鶏病支場)

2. *Mycoplasma synoviae* 感染ひなに対するタイロシンとスペクチノマイシンの投薬効果。猪飼光武 (愛知県養鶏研究所)

3. 鶏のカルシウム過剰投与の影響。野垣琢哉 (岐阜県種鶏場)

〔解説〕 鶏の飼養衛生と最近の問題点。飯塚三喜 (家畜衛試・究研第 4 部)

☆第 32 回 1976 年 2 月 20 日 (衛生週報 No. 1410)

1. 奈良県における伝染性ファブリキウス嚢病の浸潤状況と不顕性感染ひなの抗体反応。渡木一昌 (奈良県北和家保)

2. ブロイラーひなの *Mycoplasma synoviae* (MS), 黄色ブドウ球菌(ブ菌), 大腸菌の混合感染例。杉山 明, 山中進吾 (三重県中勢家保)

〔解説〕 実験計画の立て方と結果のまとめ方。滝沢隆安 (家畜衛試・研究第 2 部)

☆第 33 回 1976 年 3 月 26 日 (衛生週報 No. 1441)

1. 肉用鶏に見られた胫骨 Dyschondroplasia (異常軟骨發育)。栗栖和信 (林薬品)

2. 無血清培地による鶏腎細胞培養と鶏ウイルスの増殖。山口成夫 (鶏病支場)

3. 野外鶏における REV 及びその抗体調査。若林忠男 (鶏病支場)

4. REV-T 株の *in vitro* における増殖と保存条件。平松計久 (京都微研), 吉田 勲 (鶏病支場)
〔解説〕 病性鑑定材料の採取法について。堀内貞治 (鶏病支場)

☆第 34 回 1976 年 4 月 23 日 (衛生週報 No. 1416)

1. *Capillaria* の和名について。秋葉和温 (鶏病支場)

2. 国内で分離された REV 群ウイルスを接種した鶏の病理変化。高柳 登 (鶏病支場)

3. リンパ性白血病。谷口稔明 (鶏病支場)

〔解説〕 シリアの鶏病事情について。井上 勇 (埼玉県大宮家保)

☆第 35 回 1976 年 5 月 21 日 (衛生週報 No. 1421)

1. 九官鳥に発生したトリコロラ。堀内貞治 (鶏病支場)

2. 鶏痘ワクチンの経口及び点眼接種による免疫。大須賀徹爾 (静岡県養鶏試験場)

3. *Mycoplasma synoviae* 感染に及ぼすファブリキウス嚢除去の影響。佐藤静夫 (鶏病支場)

〔解説〕 マレック病の免疫, 特に *in vitro* で出現する膜抗原を中心として。見上 彪 (北大)

☆第 36 回 1976 年 6 月 25 日 (衛生週報 No. 1422)

1. マレック病ワクチンネーションとニューカッスル病 HI 抗体との関係。丹羽有功 (愛知県養鶏センター)

2. ニューカッスル病のスプレー接種による局所免疫。内田 昭 (大阪府農林技術センター)

3. 走査電顕による雛上部呼吸器道の所見。多田憲市 (福井県福井家保)

〔解説〕 野鳥と人間のセルカリア性皮膚炎。秋葉和温 (鶏病支場)

〔解説〕 鳥類の結核。柚木弘之 (家畜衛試・製造部)

☆第 37 回 1976 年 7 月 23 日 (衛生週報 No. 1423)

1. 採卵用成鶏に集団発生したブドウ球菌症。合田光昭 (愛知経済農協連農畜産衛研)

〔解説〕 鶏の伝染性ファブリキウス嚢病—最近の研究と将来の展望。平井克哉 (岐阜大学農学部)

☆第 38 回 1976 年 8 月 20 日 (衛生週報 No. 1438)

1. ブロイラー養鶏場におけるウイルスと抗体の動き。山口成夫 (鶏病支場)

〔解説〕 日本医師会フィルムライブラリー 16 集の (1) 免疫の概念と展望, (2) 抗体の化学, (3) 抗体の物理化学の 3 巻を上映した。

☆第39回 1976年9月17日(衛生週報 No. 1439)

1. ロイコチトゾーン症の集団発生病。藤井 振(福井県福井家保)
 2. MD病鶏と同居下での本病ワクチンの効果。渡辺広美(愛知県養鶏研究所)
 3. 野外コクシジウムの薬剤感受性について。中嶋清(愛知経済農協連農畜産衛研)
- [解説] ブロイラーにおける最近の疾病とその対策。
長谷川 保(全農東京支所)

☆第40回 1976年10月29日(衛生週報 No. 1440)

1. SPF鶏の体重及び諸臓器(心, 肺, 肝, 脾, 生殖器, ファブリキウス嚢, 胸腺)の重量変化, 若林忠男(鶏病支場)
- [解説] 鶏の産卵生理について。田中克英(岐阜大学農学部)

☆第41回 1976年11月26日(衛生週報 No. 1451)

1. ベレット化した飼料及び上水道中に含まれる細菌数。坂田雅哉(バイオ製薬)
- [紹介] 米国における鶏用ワクチンの話題。堀内貞治(鶏病支場)
- [解説] 最近の鶏病をめぐる諸問題。緒形宗雄(畜産局衛生課)

☆第42回 1976年12月17日(衛生週報 No. 1451)

1. 伝染性コリーザワクチンの異型菌に対する免疫性。中村幸彦(愛知県養鶏研究所)
 2. 鶏リンパ腫症の類症鑑別に関する研究。佐藤 隆(奈良県北和家保)
- [解説] ブロイラー産業におけるコクシジウム感染について。及川 弘(塩野義製薬油日ラボ)

☆第43回 1977年1月28日(衛生週報 No. 1452)

1. 酵素抗体法を応用した *Mycoplasma gallisepticum* (Mg) と *M. synoviae* (Ms) の同定。鶴潤精一(栃木県西那須野家保)
 2. REV感染による免疫抑制。坂田雅哉(バイオ製薬)
- [解説] ロイコチトゾーン症の防遏対策について。秋葉和温(鶏病支場)

☆第44回 1977年2月18日(衛生週報 No. 1453)

1. リンパ性白血病(LL)の野外発生病。羽生奈奈子(鶏病支場研修生)
 2. 伝染性喉頭気管炎の野外発生病。谷口稔明(鶏病支場)
- [解説] ファブリキウス嚢の機能とその問題点。佐藤孝二(名古屋大学)

☆第45回 1977年3月25日(衛生週報 No. 1458)

1. ヒナの *Salmonella infantis* 感染症に対する

Diaveridine 製剤の効果について。番場久雄(愛知県西三河家保)

2. 肉用鶏からのピコルナウイルスの分離。若林忠男(鶏病支場)
3. *Mycoplasma synoviae* の温度感受性株の作出。野々村 勲(鶏病支場)

[解説] 鶏痘を中心とした細胞性免疫について。森田千春(北里研究所)

☆第46回 1977年4月22日(衛生週報 No. 1458)

1. 動脈変性のみられた不明疾病。山中進吾(三重県中勢家保)
2. 家禽コレラ菌の感染経路と排菌の検討。谷口稔明(鶏病支場)
3. ヒナに貧血を起こす Agent について。湯浅 襄(鶏病支場)

[解説] 第11回日米マイコプラズマ会議に出席して。堀内貞治(鶏病支場)

☆第47回 1977年5月20日(衛生週報 No. 1458)

1. 飼料のサルモネラ汚染とベレット化した飼料の細菌数。森本茂一(カネニ飼料)
2. 飼料のベレット化による細菌数の減少。古田賢治(鶏病支場)

[解説] 飼料の微生物汚染, 特にサルモネラによる汚染を中心として。佐藤静夫(家畜衛試・飼料安全性研究部)

☆第48回 1977年6月24日(衛生週報 No. 1463)

1. 鶏コクシジウム症の寒天ゲル内沈降反応—抗原の検討。広瀬正裕(岐阜県岐阜家保)
2. サルファ剤中毒が疑われた病性鑑定例。谷口稔明(鶏病支場)

[解説] 動物検疫の現況について。海老洋一(動物検疫所名古屋支所)

☆第49回 1977年7月22日(衛生週報 No. 1466)

- [特別講演] ニワトリの“脚弱症候群”分類への病理学的見地からのアプローチ。板倉智敏(鳥取大学)
- [解説] 白血病ウイルスの増殖様式。中島英男(家畜衛試・伝食部)

☆第50回 1977年8月26日(衛生週報 No. 1478)

1. 静岡県に発生したロイコチトゾーン症について。椎原 隆(静岡県養鶏試験場)
2. 先天性痛風とその応用。平井愛山(千葉大・第2内科)
3. 鶏のロイコチトゾーン症の防圧について。エーザイ株式会社製作の映画

[解説] 鶏のロイコチトゾーン症について。森井 勲

(杏林大学)

☆第51回 1977年9月30日(衛生週報 No. 1479)

1. 種卵の加温処理によるマイコプラズマ・シノビエの浄化。村山仁一(新潟県養鶏試験場)
2. 初生ヒナのマイコプラズマ・ガリセプチカム及び大腸菌感染実験において認められた病変について。村田昌芳(広島大学)
3. ヒナに貧血を起こす Agent のヒナ接種例の病理変化。谷口稔明(鶏病支場)
4. マレック病ワクチンと鶏痘ワクチンの混合接種試験。中嶋 清(愛知経済農協連農畜産衛研)

〔解説〕 最近の鶏病概観。吉村昌吾(愛知経済農協連農畜産衛研)

☆第52回 1977年10月21日(衛生週報 No. 1480)

1. マイコプラズマ・シノビエ平板凝集反応と菌分離との関係。八木橋 武(日生研)
2. 種鶏に発生した壊死性腸炎とコクシジウム混合感染例。山中進吾(三重県中勢家保)
3. 鶏のビコルナウイルス(G-4260株)に対する抗体調査。若林忠男(鶏病支場)

〔解説〕 第6回世界獣医家禽会議に出席して。谷口稔明(鶏病支場)

☆第53回 1977年11月25日(衛生週報 No. 1486)

1. ロイコチトゾーン症の発生について。広瀬正裕(岐阜県岐阜家保)
2. 鶏の健康検査。馬淵貞三(岐阜県岐阜家保)

〔解説〕 インドネシアの畜産と家畜衛生の概況。岩本市蔵(京都微研)

〔解説〕 伝染性喉頭気管炎ウイルス。川村 斉(鶏病支場)

☆第54回 1977年12月16日(衛生週報 No. 1487)

1. コクシジウムオーシスト数の測定に関する2, 3の検討。及川 弘(塩野義製薬油日ラボ)
2. 採卵鶏にみられる貧血並びに出血を主徴とする病例。柴谷増博(兵庫県姫路家保)
3. Mg と *E. coli* の混合気嚢内接種試験。村田昌芳(広島大学)

〔解説〕 家畜マイコプラズマ症について。興水 馨(東大・医学部)

☆第55回 1978年1月27日(衛生週報 No. 1493)

1. *Lucocytozoon caulleryi* 感染症(後期)の病変。坂本一美(福井県福井家保)
2. SPF 鶏3世代の能力について。古田賢治(鶏病支場)

〔解説〕 鶏の開口呼吸について。板底外茂雄(家畜衛

試・研究第4部)

☆第56回 1978年2月17日(衛生週報 No. 1494)

1. 酵素抗体法を用いた *Mycoplasma gallisepticum* (Mg) と *M. synoviae* (Ms) の同定。若林由美子(鶏病支場)
2. 鶏のビコルナウイルス(G-4260株)の病原性と体内分布。若林忠男(鶏病支場)
3. 鶏のビコルナウイルス(G-4260株)接種ヒナの腎の変化。高柳 登(鶏病支場)

〔解説〕 蛍光抗体法について。内藤又夫(姫路短期大学)

☆第57回 1978年3月24日(衛生週報 No. 1500)

1. ブロイラー養鶏場における環境及び疾病調査成績。佐々木栄英(静岡県家畜衛研)
2. 国内産セキセイインコから分離したA型インフルエンザウイルス。川村 斉(鶏病支場)
3. 細網内皮症ウイルスによる神経病変。高柳 登(鶏病支場)

〔解説〕 マレック病の神経病変。杉山公宏(日獣大)

☆第58回 1978年4月28日(衛生週報 No. 1509)

1. 野外のブロイラー養鶏場より分離されたコクシジウムの薬剤感受性(1973~1976)。池田逸夫(全農名古屋支所)
2. ロイコチトゾーン症に対する鶏体由来不活化ワクチンについて。秋葉和温(鶏病支場)

〔解説〕 スカカの生態, 特にニッポンスカカの生態を中心として。丸山勝己(三重県衛生研究所)

☆第59回 1978年5月26日(衛生週報 No. 1510)

1. 野外鶏からの鶏貧血因子(CAA)の分離。湯浅爽(鶏病支場)
2. CAAの雛接種例の病理変化。谷口稔明(鶏病支場)

〔解説〕 マレック病の免疫。山口成夫(鶏病支場)

☆第60回 1978年6月23日(衛生週報 No. 1523)

1. 鶏伝染性気管炎(IB)の間接蛍光抗体法の野外診断の応用についての検討。峯苔稔三(全農飼畜中研)
2. 某ブロイラー鶏群のいわゆる“ボックリ病”の発生状況について。峯苔稔三(全農飼畜中研)
3. スミチオンの鶏卵への移行。吉川真治(愛知経済農協連農畜産衛研)
4. 1977年度愛知県下の呼吸器病について。吉村昌吾(愛知経済農協連農畜産衛研)

〔解説〕 伝染性喉頭気管炎のワクチンについて。山田進二(化血研)

☆第61回 1978年7月28日

1. 起立不能を伴う骨脆弱症鶏のビタミンC投与試

験。高橋 賢（岐阜県岐阜家保）

骨脆弱症対策として、抗生物質、栄養剤、鶏舎の消毒等が実施されているが、試みとして、ビタミンCの生理作用を応用し、その投与試験を行った。野外発症の起立不能、骨脆弱の肉用鶏11羽に、50 mg 宛隔日5回筋肉注射又は静脈注射したところ、5羽は起立し、4羽は投与前から予後不良であった。成鶏になってから解体したところ、骨は治癒し、肉質も良好であった。

2. ブドウ球菌感染症の1事例。馬淵貞三（岐阜県岐阜家保）

1978年5月～7月に約6,000羽飼養のブロイラーで、敗血症と関節炎が集団発生し、17%が斃死した。死亡鶏には肝の壊死巣、心外膜の出血が認められ、主要臓器から *St. aureus* が分離された。分離菌はオキシテトラサイクリン、タイロシン等の4剤に耐性で、アミノベンジルペニシリンにのみ感受性であった。アミノベンジルペニシリンを体重1 kg 当り20 mg 筋肉注射した結果、斃死鶏はみられなかった。

3. ある養鶏場におけるマイコプラズマの検索。八木橋 武（日生研）

Mg, Ms に対する抗体保有鶏（28羽）の主に上部気道から高率に両マイコプラズマが分離されたが、肉眼的気嚢病変は認められなかった。薬剤感受性試験では、タイロシンに対し、Mg は耐性を、Ms は感受性を示した。Mg, Ms に対する血清平板凝集抗体の経時的検索の結果では、Mg に対しては、約35週齢から、Ms に対しては約25週齢から抗体陽性鶏が高率に出現した。

4. ニワトリスカカに対する殺虫剤の効果判定での生存率（死亡率）調査の提案。秋葉和温、林 正市（鶏病支場）

各種殺虫剤はスカカに対してシャーレ試験では何れも効き方に違いはあるが、有効であることが示されている。然し、野外試験でのライトトラップによる採取数と吸血率の調査のみでは、必ずしも納得のゆく成績は得られていない。殺虫剤の効果判定の調査において、生存しているものと死亡しているものとを分けて、生存率を求める方法を採用することにより、シャーレ内試験と同様に殺虫剤別の効力を判定し得ることが判ったので提案する。

5. ブロイラーにみられた壊死性腸炎。番場久雄（愛知県西三河家保）

900羽群のブロイラーに2週齢頃から20日間に315羽（35%）死亡する病気が発生した。病鶏は突発的に元気が消失し、嗜眠状態となり3～5時間で死亡した。小腸粘膜の偽膜形成とジフテリア性腸炎と肝の緑色化が少数見られた。空回腸部から *Clostridium perfringens* が

多数（ 3.6×10^9 /ml）分離され、コクシジウムのオーシストは陰性であった。次回導入のロットにも15日齢と20日齢に発生し、アミノベンジルペニシリンを体重 kg 当り10 mg 4日間の飲水投与により、2日目から著効が認められた。

〔解説〕 マイコプラズマ・ガリセプチカム (Mg) 生ワクチンの開発の経緯について。武光哲（京都微研）

Mg 感染症の防圧にワクチンによる対応を考え、Mg の KP-13 株を低温培養継代して弱毒株を作出した。この弱毒株 (G-250 株) は次の諸性状を持っていた。1) PPLO 液体培地において 32°C でよく増殖するが、42°C では発育しない。2) 鶏の鼻腔内に接種すると接種部に局在し、気道あるいは鶏体内各部位に転移しない。また、気管及び後胸気嚢内に接種しても気嚢炎が見られない。3) 同居感染がなく、伝染性気管支炎又は伝染性喉頭気管炎ウイルスを混合接種しても病性を増悪しない。4) 鶏に点菌接種あるいは飲水投与した後、強毒株で気嚢内攻撃しても気嚢炎を起こさない。作出した弱毒株のこれらの性状から、G-250 株を原株として製造した生ワクチンを野外応用し、その安全性と有効性が確認されたなどが資料と成績によって解説された。山本隆典（岐阜県飛騨家保）

☆第62回 1978年8月25日

1. 鶏腎炎ウイルスの感染経路とそれに対する日齢別感受性。今田忠男（鶏病支場）

鶏脳脊髄炎ウイルスとは異なるピコルナウイルスを分離した。このウイルスは初生ヒナの腎でよく増殖し、腎炎を起こすことから鶏腎炎ウイルスと呼ぶことを第85回日本獣医学会で提案した。このウイルスの G-4260 株を経口、皮下、気管内、筋肉内、腹腔内及び脳内接種あるいは同居感染を行い感染経路を検討した。その結果いずれの場合も鶏は容易に感染し、腎病変を現したが経口及び気管内接種が最も強かった。また、経口接種して日齢別の感受性を調べたところ、0～28日齢のヒナが最も感受性が高かった。

〔解説〕 *Haemophilus paragallinarum* の血清型と免疫型。久米勝巳（北研）

伝染性コリーザ感染鶏から分離される *Haemophilus* 菌はV因子を要求し、X因子を要求しないことから *Haemophilus paragallinarum* と呼ぶのが正しいこと、現在我が国の伝染性コリーザの原因菌として血球凝集能を持つものと持たない2つの型があり、これらは抗原性も免疫性も異なることなどが詳しく解説された。このことから伝染性コリーザの予防には2つの血清型の菌を混合した2価ワクチンでなければ効果的でないことが説明された。石塚喜四郎（三重県中勢家保）